

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
やまだわら	約4.3ha	680kg/10a	188kg/10a (492kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

○法人経営

○水稲(主食用米、飼料用米)・小麦・大豆の2年3作体系を導入し、ブロックローテーションを実施している。

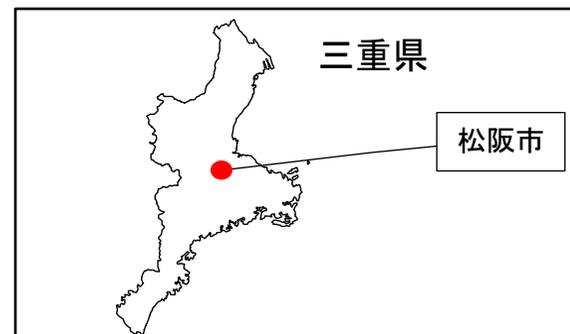
【作付品目】

○主食用米

コシヒカリなど 約38.7ha

○飼料用米(種子用を含む)

やまだわら 約4.3ha



【取組のきっかけ】

○主食用米との作期分散による作業の効率化や経営の安定化を図るため、多収が期待できる「やまだわら」を選定し、飼料用米の栽培に取り組んだ。

【取組概要】

○主食用米は「コシヒカリ」や「にじのきらめき」などを生産しており、主食用米との作期分散を図るため、主食用米よりも早い時期に飼料用米の作付けを行い、効率よく作業を実施している。

○①苗の栽植本数の減少(10a当たり15枚から11枚)により収穫量が減少しないよう、密播を行う。②稲わら・麦わらのすき込みによる土づくりを行うとともに、田植えと同時に、牛ふん堆肥、多収品種専用一発肥料の側条施肥を行う。③無人ヘリコプターによる病害虫の防除作業を委託。④田植えと同時に除草剤を散布する「水稲移植同時側条施用技術」により、効率よく雑草を防除するなど、省力化・コスト低減を図り、多収に向けた取組みを行っている。

○耕畜連携(畜産農家に稲わらを提供し、牛ふん堆肥の提供を受ける)により、循環型農業を実現している。

○①地域の生産者と情報共有し、随時、取組品種、作付時期及び作業方法を見直し、PDCAサイクルを回す。②従業員の処遇や労働環境に配慮し、繁忙期の草刈り作業などには、地域の定年退職者を臨時雇用するなど、地域を巻き込んだ取組みを行っている。